
運命の糸

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の糸

【コード】

N1490B

【作者名】

蒼

【あらすじ】

運命の赤い糸についての会話です。二人の関係は不明。

『ねえねえ。』

『ん？』

『赤い糸って信じる？』

私は隣にいる君に聞いた。今は学校の帰りでこの道を歩いているのは私と君の二人だけ。

『どうしたんだよ？いきなり。』

『ん？なんとなく。聞いてみたくて。』

私は答えた。

『赤い糸って運命の赤い糸のことか？』

『うん。』

私は頷く。

君は『んー』としばらく唸ってから言った。

『わからない。』

『どづしてっ。』

私は尋ねる。

『だってさあ。』

『うん。』

『だって今ここを歩いているのも一応運命かもしれないだろ？』

『うん。』

『だったらさあ、ここら辺全体に糸が張ってあるようなもんだろ？』
『うん？』

『なら糸なんてあるようでないもんだろ？』

なんだか変な方向に話がずれてきた。

私はさつきから顔が固まっている。

君は私が聞いていないのに気付いてないのか話続ける。

『だからさ　なんだよ　だよね　んでさ　凄いと』

君の熱弁は私の家に着くまで続いた。

『　　それでその運命の中にオレとお前が出会ったことまで組み込まれてるんだぜ。』

『えっ』

最後の方の言葉だけははっきり聞こえた。

『だからさ、赤い糸かは分かんないけど絶対オレ達を結んでる糸は他の糸とは違う　と思う。』

『えっ　あっう、うん！私もそう思う。』

私は急いで頷いた。変な方にずれたけど終わり良ければ全て良し！

私達のこれからも糸で繋がっていると良いな。

(後書き)

m またまた短編です。短いです。感想・文句等お願いしますm()

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490b/>

運命の糸

2011年1月13日14時19分発行